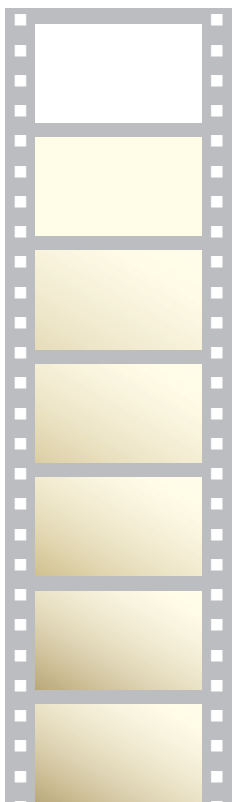


伸<sup>ノブ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫





## 第十五回 「父の好きな二番館・母の好きなチヨコレート」

以前、母と観た映画のことを話しましたが、父と観た映画の話はまだしていませんでした。ぼくの記憶によれば、父が連れてつてくれた映画はアクション物が多かったようです。そして、封切作品（フィルムが入っている缶にしてある封、つまり、封切とはその封を切ること、まだ上映していない映画のこと）ではなく「セカンド二番館」（封切上映のあと数週間経過してから、封切料金よりも安く、話題の映画を二本立てで上映する映画館のこと）での作品でした。「七人の侍」（54年製作・黒澤明監督）と「馬喰一代」（51年製作・木村恵吾監督・出演・三船敏郎、京マチ子）の二本立、「地底探険」（59年製作・ヘンリー・レヴィン監督・出演・パット・ブーン、ジェームズ・メイソン）と「ギャング映画」（映像は一部、記憶にあるのですが、タイトルが思い出せない）の二本立。「用心棒」（61年製作）と「椿三十郎」（62年製作）の二本立などの作品を思い出します。

三船敏郎特集で組まれた「七人の侍」と「馬喰一代」の作品はおもしろいのですが、長時間の作品でお腹はすいてくるし、家の人も待っているし、ぼくは、「お母さんが心配するからもう帰ろうよ」と隣の席に座っていた父にささやいた覚えがあります。

父は凝り性で多趣味でした。高校時代から観世流の謡曲ウタヅメを習い、飲めばアカペラで古賀政男作曲の流行歌（当時は歌謡曲と言わなかった。）を歌う音量を持つていました。

悪いことに出張所となりは小料理屋で、父はお客さんが来れば、その店でもてなしました。アルコールが全身に巡って快くなると、古賀メロディーをカウンターで歌い出し、それがとなりの出張所の二階に住んでいる家族にまで聞こえて来たものです。

また、昭和30年代はキャバレーが流行しましたが、頼まれもしないのに酔ってマイクの前で歌い出し、となりのテーブルからビールが届き、「ごちそうになったこと

もある」と本人が話していましたから、事実でしょう。

その他、出張所の野球チームのメンバーであり、国内外のミステリー小説や探偵小説が大好きで、新刊本や古本やら八畳間の壁一杯に本棚を作り書庫にしています。しかし、亡くなった時、息子のぼくが処理に困り、好きな本だけ取って、あとは古本屋に引き取ってもらいました。ぼくはその経験から、自分で70年代から購入していた「キネマ旬報」は東京の人へ、「スクリーン」は映画館へ寄贈しました。本人にとっては宝物ですが、他人にとってはゴミという考え方もありますよね。

多くの趣味を持ち、酒を飲んでは歌を唄い、家には小説を読み、能楽を愛した父は、母とどういふきつかけで出会ったのか話しましょう。

父の通っていた謡曲の教室に母の父も通っていて、どちらの家からか結婚話が浮上し、お見合いをして結婚をしたと聞きました。母に言わせれば、母はM製菓のチョコレートが大好きで、毎日、チョコレートが食べられるという夢を抱きながら嫁にきたと話していました。

母の誕生日は7月7日の七夕さま、父の誕生日は2月14日のバレンタインデー、  
この愛の夫婦に生まれたのが、ぼくなのです。

伸 (続)

平成23年3月